

特34

445

共二本

204507-001-4

特34-445

新十二月帖 初編

河村 祐吉/著

上

M7

EDS-0177



特34

445

評

官

河村祐吉著

千里必閱

童蒙 必携 新十二月帖

全二冊

明治七年

十二月發兌

秋香書屋藏版



小學文苑白事

讀、在、著、通、此

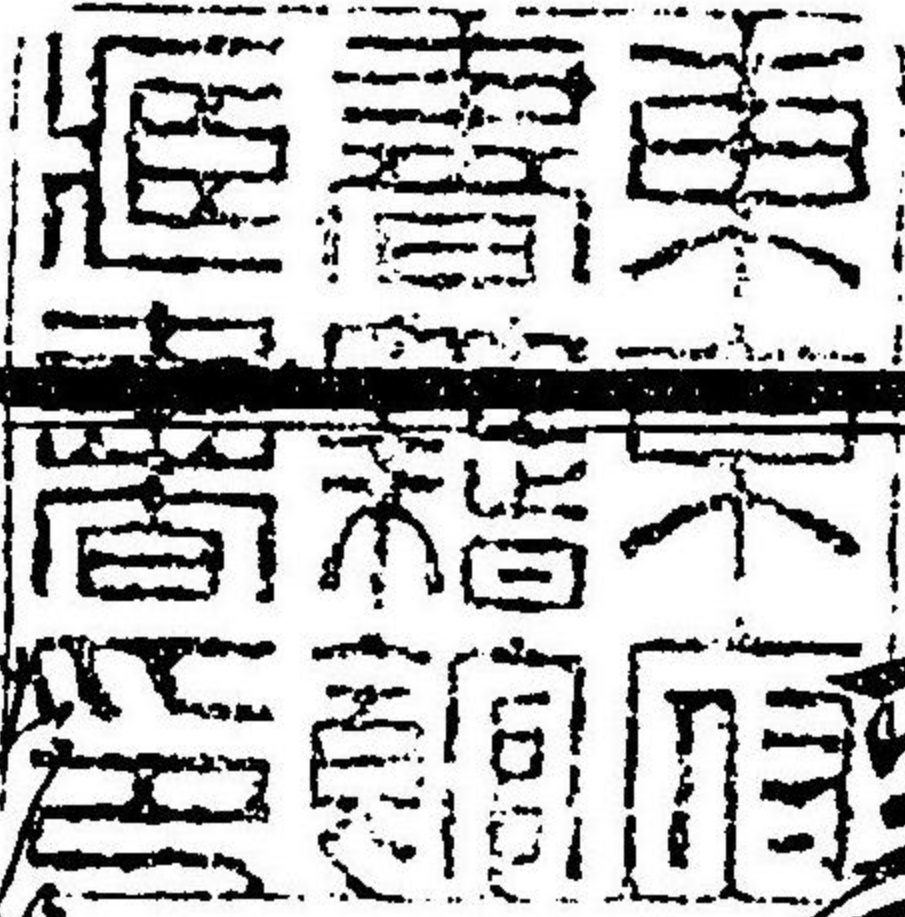
身、明、且、皆、且、保

南次書

紀元二千五百三十四年

秋十月

榮睦自題



新十二月帖 初編

河村祐吉著

大陽回曆四海各國

新禧了般至祝無疆

伏惟動止萬福被加

ふして ちんぜん ぞうし ばんふく べいか

南山之層奉恐賀度僕

なんざん ぞうし ほうおそがた ぼく

及卑累百事一依舊

およひ へいらい びじつ ひとしよ ちよ

不勞尊懷幸甚然者

ふらう ぞん かい さいじん ぜんしや

本月三十一日也

このつき さんじゅういちにち ぜ

孝明天皇御祭日也

かうめいてん ぎやう ぎやう じつ ぜ

新曆中、揚載有度

しんれき ちゆう ちやう さい あり ぎやう

慶同 帝之皇統

けいどう たい じの ぎやう とう

御事蹟等法軍略

砌蒙示教度其福助

歎冬華鷄始乳候

後謹言

一月

為持年表上可仕奉

存心皮又重製形也

董績數四如原新事

之由事又事也度申納

しゆて つたひぬか わくらる せいのゆく ぞう

因重園家法禮少僧

ニス イチドウ キゲンヨク トシラ

歎彼來者來歎祝之

トリ ヲロロ ヲロロ ヲロロ

至山坐坐聲色少出

フタクシカタ イナク

各異加經年一信幸

カハリナク ムタナルトシ

勿煩之高也

シニハイクダサルナ

孝明帝之御來歷

らふまじ

君儀敬為存

ちんご ちんご

夏六月北軍軍利加

が っ し ゅ こ ぐ せ い ー と

合衆國之水師提督

フネノタイシヤウ

マツチウセヘルリ始々お州

う ら が わ う っ た お っ て こ じ に

浦賀之港より殊る於是

シナト

品川海口及云諸國

ま ち ら ぐ わ い ぐ ぐ お よ

不砲臺を築く安政

ダイバ

六年己未魯里英佛

オロシヤ アンリカ イギリス フランス

能交易の力を得る高銀

カウエキバ

武安沖奈川に在る

強ふ是各國交際

権憲をり位在るに

九年聖算に在る

山に強ふは月
輪東山の陵に葬奉る

証候に及は

谷を甘他期に眉を

中書及好復

ハシジメタス

一月

今日吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉

黄島出者増之法法法

ウグヒス

キゲンヨク

欣折之至及陣之来ん

十百之紀元節之曆中

標記有之且官自之

為清税安於

朝廷酒饌之賜以多趣

一体紅之帝年之會

奉事在式法統日

自國旗之揚天下咸

豫白管詢仕及少承緣是

祈好首

二月

乃采雲之好備然之紅之會

テガミ

之典故可申進言為要御殿

願承旨知院令之奉旨

明治七

二子五百二十四年前

神皇般若宗為尊史和

國權原不於御位

即皇孫不其是也人自皇始祖

神武天皇之謚奉

以元皇以其謚即位

昔の天子の徳

古くは天子の徳

之を後日天子の徳

皇國の民の徳

山陵の向ひ違拝敬

神恩の報ひ奉らすん

不可有也と漸り乃至

拙谷の如き不慮

新編皇朝書

二月

蘭亭脩禊曲水流觴

三月三日修禊於曲水

授子孫以正月十五日

野梅漸欲繁
姝桃

心
君

禁中
於

王
御

詩¹を^レ作り^テ海²を^レな^レる

も³也⁴海⁵の⁶多⁷き⁸

く⁹文人¹⁰以下¹¹是¹²の¹³心

し¹⁴康¹⁵保¹⁶乃¹⁷法¹⁸記¹⁹

か²⁰き²¹し²²る²³又²⁴

顯²⁵宗²⁶天²⁷白²⁸皇²⁹元³⁰年³¹三³²月

上³³巳³⁴の³⁵日³⁶後³⁷苑³⁸に³⁹幸⁴⁰を⁴¹す

先⁴²づ⁴³く⁴⁴の⁴⁵野⁴⁶に⁴⁷あ⁴⁸り

或云一先之日本記

ヤサカニ

新十二片中央

見之者然之曲水宴

志 記

記

ハ支那之風俗と擧

モロコシ

ナズラ

朝廷より遊ばせ

モロコシ

遊

下之是離念乃

志

記

ナズラ

事もあはれも五節

志

白麩も此

志

出の今行

志

きんぎょのしるしをたがひて

うしろに一粒の星あり及

はげしくも何時始り

銀葉の糸織の糸を斜

月娥の性も稱し古来

之を伏しおみ福を祈

望月を皎くも照らす

中村のしるしをたがひて

三百六十五日皆満月也

十五年如一日之必可織

身亦存雖然之

勝之持一三五九勝八不

持元来一箇之月之

之

外あまを彼三月乃福を

人亦授事何故不

自死事こと、少路ちうじゆ家け結むす不な

度たび自みづか母はは拜ひら

三月

物もの問もん題だい、自みづか味あじ不な優やさ之し
ワタクシ

所ところ見けん陈ちん述じゆつ、可たがひ住ぢゆう彼かの月げつ

一いち塊くわい、地ち球きゆう、自みづか身みづか

暉あかりをを散ちりす、自みづか身みづか大おほい陽ひ

光あかり輝か不な映えい、之これ然しか

新一年日記巻

三十一

月球地球の運轉不依て

照射消去寸何を盈虚

因く福を興と吾を純

理安んや勝を安き純

年々々々即ち野暮の

風習を之開明を會

少際一實不可恥あり

往昔西洋之真家傳

閩龍こらんびび之こらんびび人こらんびび其こらんびび里こらんびび聖こらんびび聖こらんびび利こらんびび

加か之の五ご湖こ之の人にんとと航かう海かい之の人にん

去こ人にん是こ之の怒ど之の食じき料りょう之の人にん

與よ之の人にん其こ之の怒ど之の食じき料りょう之の人にん

却こ說せつ之の人にん其こ之の怒ど之の食じき料りょう之の人にん

之の鬼き神しん之の如ごと之の人にん

偶ぐ月げつ之の人にん其こ之の怒ど之の食じき料りょう之の人にん

閩龍こらんびび之の人にん其こ之の怒ど之の食じき料りょう之の人にん

新刊三才圖會

七

忽ち一筆を以て月の

物に結せん

去人をも集る虚懸

甲我を天使たり天帝

我もこの此國を

汝等是れ抗

響へ守上天震怒

月水を生を照

と言来て訖らざる

漸く蝕を催す土人怒

懼し叩頭罪を謝す

曰く從今以往誓す天

使の命り事をも願ふ

天怒を宥め強へ閣龍

蝕を將ふ後をん

候し天子向ふ謝罪之

新刊三行帖卷一

一

融とくを為なす融とく已まふ清きよす

カタナ

去こ人ひと大おほ悦よろこ極ぎやく終つひ

ヨロコビ

周しう翻ほん能あた術じゆつ中ちゆう又また踏ふみ

まゆつちう

おちい

是こゝ至いた跡あと第だい者しや一いつ笑わら又また傳たづ言げん

やどん

うゝゝ

再また明あき後ご者しや一いつ笑わら又また傳たづ言げん

みづづき

性しやう多た好こう一いつ廿にじふ六ろく夜や月つき

待まち等ら之の恰たつた也なり是こゝ又また教しやくす

まち

たつた

しやく

事こと之の存ぞん在ざい保ほ一いつ日にち

ま

運動地球之旋轉月光

盈缺之理を究る其

書甚多一往

茲よ不贅

三月

折簡拝陪玄鳥南

至り鴻雁北歸り時

節清明近し春

清浄多考之然の

メテタル

三神武天皇御祭

ミコ

日付某山江登り遠お仕

ヒト

ミコ

ミコ

歸路ハ聯歩道遙

カヘリミチ

ゴドウダウ

ブレク

某地櫻花之下控腰

サクラ

瓢を倒し行厨を傾け

タン

ミ

セ

ミ

ミ

若狭外江無名傳且

フサガ

アソビ

山陵を往事にお祝ひ

ミ

ミ

ミ

此同伴は心算の者也 賤

トモ りづま

コノゾミ

フクシム

累のお推し一平なる旨好仇

カナイ

アナタノウチカタ

オノオノ

ニ

グ

少同輩も亦所望も不具

ジンリキデツダチ

アラク

四月

毎朝朝披法熱浴感

テガミ

ハイケン

シニセツノオフセ

アリ

佩々々々々々々々々々々々

ガタク

サソヒ

可申と存居度又終る

サレダ

その

ま

トヤク

ヤク

先其具如業雀確

コノコノアフト

ウレシク

然夫時日多矣九時安晚不づん

備便路敷高門人カ車

伴列よお加り心強顔マウリイテ

荆釵も同く虫煩辱ヤクカヒ

可頼好個々時多し紅縁ハナヤナギ
惱人還逢之佳趣カヘリガケ是也ナモシロハ

存息想コ、ロニウカフ

帝陵之御来曆明且高ニハミタ

神武天皇

新十二月中巻

(十三)

聽ちやう達ちやうすちやう命めいのの美み

美み傍はう昭しやう也やのの美み

鳴な呼このの美み間ま大だい鼻び

一いのの附つ孝かう維い氏し

神武天皇一人白虎鼻び

祖そのの鷹たか鷲じゆ草くさ葺ぎ不ふ

合が尊そん弟てい四し之の白はく子こ明めい達たつ

谿たに如ごとままししとと長ちやう髓ずい彦ひこ

新編十三戸部書

三

兄猶去蜘蛛多を誅ちり

始々天下を統つと一萬世

多寡を業を創オントシの聖壽

百二十歳をはら一山崩御

給ふ大和國之帝郡たろいらら畝

傍山東北陵之葬奉まがひる

猶委及事八國史にほんのしよもつ就つたて

活了解可有之餘しよウチの結むすば

眉宇^{まゆ}所^{ところ}中^{なか}一^{ひと}の仕^し也^{なり}又^{また}乙^{おつ}
イウシアケ

四月

新^{あらた}緑^{ろく}透^と眼^{がん}筋^{しん}勢^{せい}
メニアラバ ヤイホトノキスノコエ

身^み之^の久^く愛^{あい}音^ね空^{くう}あり

未^ま了^{りょう}之^の意^い何^{なに}健^{けん}速^{すみ}在^あ否^や有^あり
キケレヨク ヨロコビ
不^ふ堪^た之^の迷^ま迷^ま先^{せん}年^{ねん}觀^{くわん}究^{きう}
アヒコチアソビ

多^た免^{めん}四^し國^{こく}九^く州^{しゅう}歷^{れき}遊^{ゆう}跋^{はく}

歸^{かへり}路^り陰^{いん}曆^{れき}之^の月^{げつ}廿^{にじ}
カヘリコチ

四日陽磨より比較アハス終る

正しく月二万七千七百七十九國アハス

毒馬子關ふ信宿新シモノセキ

插因所稻為町遊女シモノセキ

昔餅ひの袴そつ毎様マみみのの好好を

着ちやん一一年年女女のの粧まをを扮ふん

阿弥陀寺あみだのの傍はらり

安徳あん天皇てん乃の御ご廟ぼ

新十二月抄卷上

廿九

有得^まと^{えら}去^く人^{ひと}群^{ぐん}集^{しよ}

サンケイ
みろもの

觀^み者^{もの}堵^と牆^かみ^ぬ依^よ而^ら

一イカキ

お^お聲^{こゑ}も^も心^{こゝろ}も^も空^{そら}も^も此^{こゝ}も^も

きんらゆ
くらせん

西^{ざい}海^{かい}の^の決^{けつ}裁^{さい}天^{てん}皇^{こう}

ダニノウラ

タカヒ

御^ご入^い水^{すい}自^{みづ}白^{しろ}少^{すく}子^こ

せん
ご

先^{せん}帝^{てい}會^{かい}と^と稱^{しょう}す^す彼^{かの}孫^{そん}女^{にょ}

せん
ご

中^{ちゆう}も^も往^{わう}古^こ宮^{みやう}女^{にょ}或^{ある}八^{はち}年^{ねん}

ソノムネシ
か

氏^し家^け族^{ぞく}所^{ところ}潜^{ひそ}匿^{かく}

イナモン

カクレ

糊子のまゝ白粉子こ ころ

擻ダ 卑賤の業クチスキ

始ナストラヘ 傳へ御追薦イヤシキ

御廟江糸水詣ワザ

以て然るも委く

事ことの承り不申せら以説トキシメシ

終る度とを新しん也

五月

教ハイクン劄ハイクン在ハイクン完ハイクン備ハイクン

安德天皇自皇中奉之

御諱ハ言仁 高倉帝之

皇子御母ハ建礼門院

申平右國清盛之女也

御年三歳行ハ位即

給ハハ後醍醐天皇

百九十年前文治元年

三月廿四日源義經大平

ふらふらふらふら

氏を壇浦に破る宗盛清

たんのう

かぶ

ひのふら

あま

宗時忠孝を虜にす平

とね

とつこ

家元七将知感落筆経

しやう

さう

こ

盛資盛行盛有楚教

せし

ゆは

ゆり

めり

経等海底に没す二位乃

こ

ふら

めら

ふら

禪尼 帝を抱き奉り

ぜん

ぶら

一首の歌ふ 中終のふ

あ

う

其月之流は波のま

も都ありとるに後

遂に帝は周を海

隅に茲源軍凱旋す

カチイクサ

江に舟をよる申進を鳴呼

九郎は暴悍を御特子

乃果毅矢錯と伝

帝御年八歳とて母

禍之遭ひ後ふ 皇國の

臣民の孰も感傷

悲泣せんと 臨楮

惨然濕杖

五月

為象錢を譽る楊花

繪を敷筆研を急

吾陳を以て子百大後

曆中揚裁有後大被

ヨシノナチ

シルシ

ナゴシ

無故出落海幸願度其

ワケ

ヲシ

六月

蓄之義者展興居以安

ム

セシ

ム

シ

ム

ム

寧茶祝之儲大務之

ホ

シ

ム

シ

緣由其者及之類公事

シ

ム

シ

ム

根源之括舉之入目覽

シ

ム

シ

ム

シ

ム

又キカキ

度大之入之入之百官

あはれく朱雀門

あつらうて後志侍あり

六月十二日二重公有

天武天皇皇名清時より

けしめる解^ゲ除^ト觸^シ穢^エ

たご能時^{ハシ}有^{ハシ}神子^{カミコ}を

行^イ時^ト之^ノ陰^{カゲ}時^トも^モ孝^{コウ}よ

あはれもの^{アハレモノ}あはれ^{アハレ}大^{オホ}後^{ノチ}の^ノ友^{トモ}

一用、あしきと後、

有り、備へり、家、

福、き、あ、り、有、り、

自、乃、ち、あ、り、

人、は、ち、き、勢、孔、の、

の、あ、り、の、あ、り、作者此、歌、を

と、あ、り、の、あ、り、

侍、了、然、系、法、性、寺、關、白

記ノ里ノ事ノ都ノ本

此ノ事ノ都ノ本

武部 和泉

此ノ事ノ都ノ本

方ノ事ノ都ノ本

紙令延喜武部

此ノ事ノ都ノ本

義ノ事ノ都ノ本

たふさふさとし記載の事

あ類及ふ事也

六月

